

性犯罪調書 汚された女性たち 第二話

スカトロ水槽

制作／人工美少女製作所
ふあつときやつとDX

序章 水中排便、間近

「ンモオオオオオオッ！ オオオオオオオッ！」

私の肛門は、決壊寸前でした……。

全裸に剥かれて拘束され、巨大な水槽の中に沈められています。

足にはしっかりと重りが取り付けられていて、浮き上がることはありません……。

「フーッ！ フーッ！ フーッ！」

顔に取り付けられたマスクのおかげで呼吸はできますが、問題なのは肛門です。

宿便が溜まった腸内に、大量の浣腸を施され、今や決壊寸前。

このまま漏らせば水中に、便の華が咲き誇ることでしょう……。

既に何度も尿を漏らしていて、いくつもの花卉が水中を漂っています……。

「ヒヒッ！ そろそろみたいだなあ……」

私を誘拐して監禁した男。

何をするわけでもなく、水槽の外から、じっと私を眺めています。

「ンモオーッ！ ンモオーッ！」

くぐもった声で懇願してみるものの、男は薄笑いを浮かべるだけ……。

——ガクッ！ ガクッ！ ガクッ！

最後の波がやってきました。

——ギュルッ！ ギュルッ！ グルルル……。

水槽の冷たい水で冷やされたお腹は、もう持ちこたえられません……。

「フモッ!? オッ！ ンボオオオオオオオオオオオッ!!」

——ブボッ——

第一章 水槽監禁

「ンムッ!？」

私が気づいた時には、もう、水槽の中でした……。

——ジャラッ！ ジャラッ！

目の前は一面、ガラスの壁。女性がスッポリおさまってしまう、巨大な水槽です。

両手両足からは鎖が伸び、水槽内でX字に拘束されていました。

いつの間に脱がされたのか、身体には着衣が一切ありません。

白のレースのブラとショーツ、ガーターストッキング、タイトスカートにニット……。

ガラス越しに、乱雑に脱ぎ捨てられた衣服が散乱していました。

「んーっ！ んーっ！」

顔にはマスクが被せられていて、パイプが伸びています。呼吸は普通にできるようです。

「んおおー！ んおおー！」

助けを呼ぼうと叫んでみますが、くぐもった声が漏れるだけ。

その時、物陰から男が現れました。

「ヒヒッ！ ようやく気づいたようだなあ……」

浮浪者のような風体。その姿を見た時、私の脳裏に、あるニュースがよぎりました。

(最近、近くで起きてる誘拐監禁事件……もしかして、この男が……!?)

「ンッ、ンンーーッ!」

「へへッ、騒いでも無駄だぜえ……誰も来やしねえよ」

目線だけを動かして辺りを見回す。どこかの廃屋のような……。

(なんて静かなの……何の音もしない……)

市街地からはかなり離れているのかもしれませんが。たしかに騒いでも無駄なようです……。

「さて……ショータイムの始まりだ……」

「ンムッ! ンムウウウウウウウウウウッ——!!」

それが恥辱の幕開けだったのです……。

*

*

*

*

*

「ふむ……それが監禁された時の状況ですね」

「誘拐される前のことは覚えていますか?」

事件後の取調室。私は、担当刑事の真鍋信也まなべしんやさんから事情聴取を受けています。

「それが……あまり思い出せないんです……」

「たぶん……買い物の帰りだったと思うのですが……」

三年前に結婚した夫との二人暮らし。

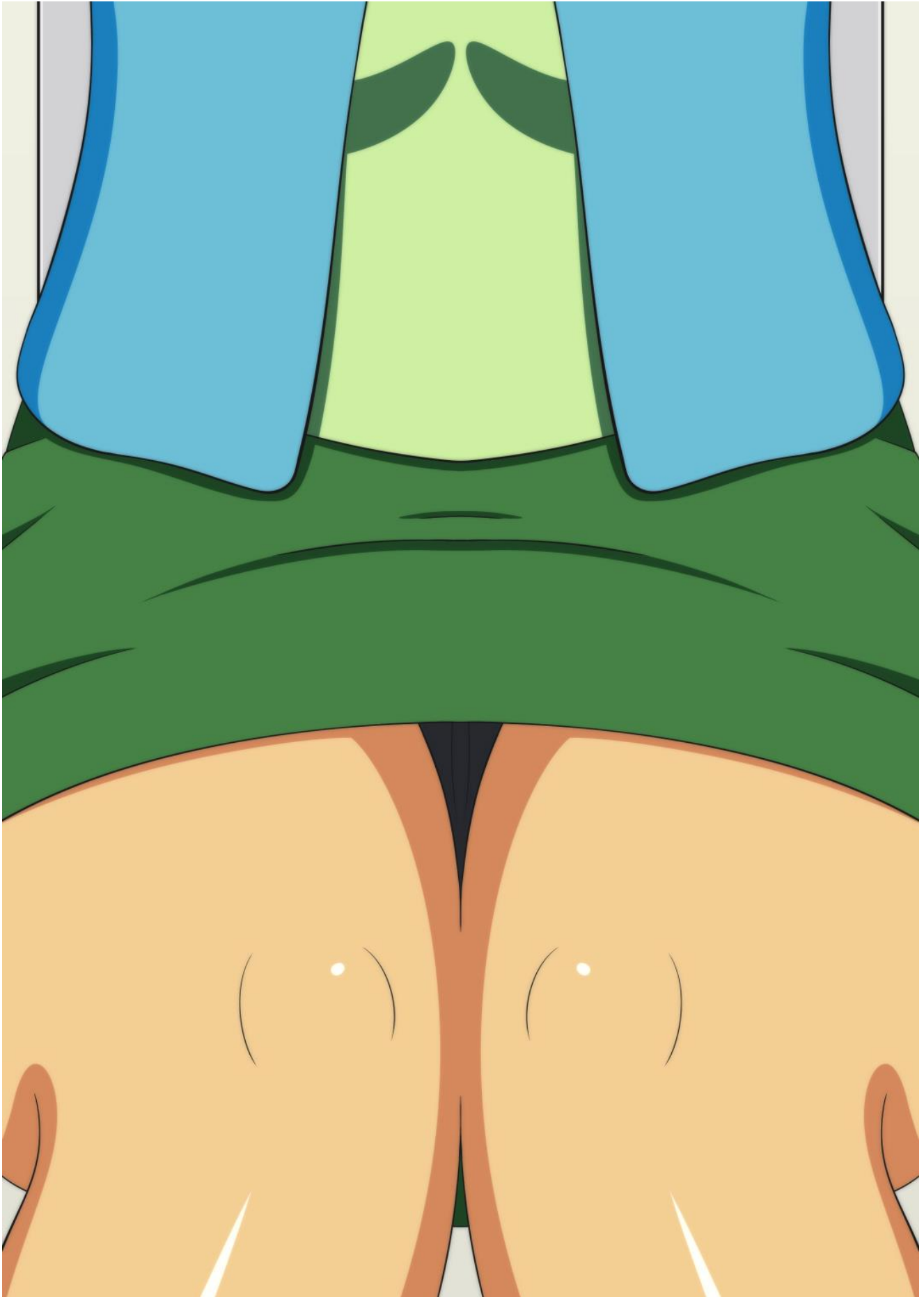
専業主婦の私は、毎日の買い物が日課になっています。

「そうですか……事件のシヨックかも知れませんか」

「被害者の方の記憶が曖昧なのは、よくあることです」

「はあ……そうなんですか」

——ギッ



使い古されて、クッションが潰れたパイプ椅子。

お尻が痛くなった私は、座り直しました。

「ところで……ご主人とは仲がよろしいのですか？」

「？ いい……と思いますけど」

なぜ？ 少し疑問に思いましたが、素直に答えました。

「きょうも付き添うと言ってくれたのですが、仕事の方を優先して貰いました」
いつも私を気遣ってくれる、優しい夫。

「そうだったんですか」

「えー……はなむらすみか華村純香さん……ご主人のお名前も教えて頂けますか？」

「はい、のりゆき紀行……華村紀行です」

夫は、偶然再開した幼馴染。高校まで一緒だったのですが、進路が違ってそれから離れ離れに。
初恋の相手だったんです。

「ありがとうございます」

「えー……純香さんは三十五歳でしたね。ご主人の方は？」

「同年……三十五歳です」

誕生日も近くて、小さい頃には一緒に誕生パーティーをすることもありました。

「そうでしたか、ありがとうございます」

「なにか犯人の標的の参考になるかと思ったもので」

「はあ……」

（標的……？ 犯人がそんなこと知ってるとは思えないけど……）

「では、続きを話して頂けますか？」

「は、はい……」

そう促され、私は事件の顛末の続きを語り始めました――

第二章 注水開始

——ゴポツ！ ビチャツ！ ビチャチャチャ！！

（えっ!? なにっ!? 水っ!?）

水槽に差し込まれたパイプから、大量の水が流れ出てきました。

「ソーッ！」

水の勢いは強く、すぐに膝上まで水が上がってきました。

（——ッ！ 冷たいっ!?）

まるで氷で冷やされたような冷水。

只でさえ丸裸にされて冷え切った身体が、さらに芯から冷えていきます……。

「ヒヒッ！ どんどん入れていくぜえ！」

——ゴポツ！ ゴポツ！ ゴポツ！

水はどんどん注入されていき、みるみるうちに水位が上がってきました。

ふともも、おまんこ、腰、おっぱい、首……。

「ソソッ！」

ついには頭まで、完全に水没してしまいました……。

でも、マスクのおかげでちゃんと呼吸はできます。

——ブルルッ

（ううっ……さ、寒いっ！）

冷たい水が、全身から熱量を奪っていきます。

しかも水は循環しているようで、常に冷水と入れ替わっています。

（あっ！ ダメッ！ おしっこがっ!?!）

身体が冷えたせいで、おしっこが我慢できなくなってきました。

女の子は男の子みたいに、いっぱいおしっこ我慢できないんです……。

「お、もうきたか。ヒヒッ！ じっくり見といてやるぜえ……」

男の視線が私の股間に集中し、じっと見つめてきます。

(だめえ……見ないでえ……あっ！)

——ちよろっ……

膀胱が緩み、少し尿が漏れました。

股間周りの水が黄色く染まります。

(ダ、ダメッ！ 我慢してえ……っ！)

——キュウウウッ！

膀胱をきつく締め、それ以上のお漏らしを防ぎました。

(ああ……なんとか……)

「なんだ止まっちゃったか、まあいい……」

「時間はたっぷりあるからなあ……ヒヒッ！」

薄気味悪く笑う男……私は簡単には開放されないことを覚悟しました——

*

*

*

*

*

——ギシッ……

「あ、あの……ここから先は……は、話したくないのですが……」

思い出したくない事件の記憶……でも、何故かその光景は脳裏に焼き付いて離れません……。

「そういうわけには……こちらで調書を取る必要がありますので……」

「犯人逮捕のためにも、宜しく願います」

そう言われてしまうと、話さなければいけない気がしました。

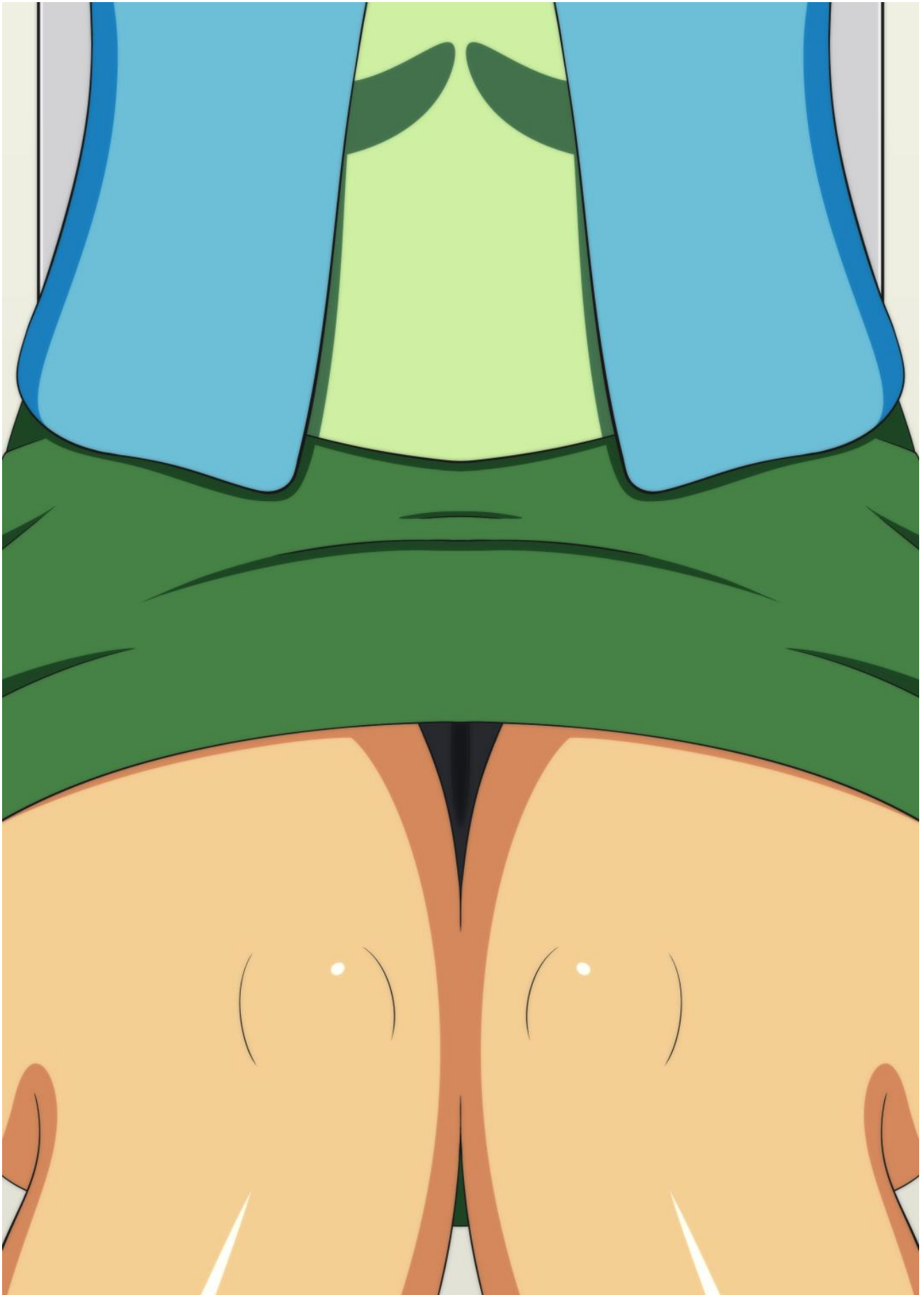
私としても犯人が野放しになっているのは怖いので……。

「うう……わ、わかりました……」

しづしが了承した私は話を続けます。

——じわっ……

緊張のためか、股間が湿り気を帯びてきたように感じました。



第三章 尿の華

——水槽に沈められてから三時間程、私は徐々に増大する尿意に必死に耐えていました。

「ヒヒッ！ そろそろ限界じゃねえのかあ？」

男の言う通り、とっくに膀胱は限界……。

（ああ……もう無理……これ以上頑張っても無駄だわ……）

観念した私は、股間に入れていた力を抜きました。

筋肉の収縮で引き締まっていたヒップが、まるで空気でも入れられたかのように膨らみます。

——しゅわあああああ……。

二度目、今度は大輪の尿の華が咲き誇りました。

（あつ、あああつ！ でも……き、気持ちいい……！）

ずつと我慢していた放尿に、私は快感さえ覚えてしまいました。

（えっ!? 嘘ッ!? イック……!）

——ビクッ！ ビクッ！

「なんだ、漏らしてイッちまったのか、ヒヒッ！」

男に絶頂を見抜かれ、顔がカァツと赤くなります……。

（うう……なんで私イッて……）

（夫とのセックスでも滅多にイかないのに……）

（あっ!?)

大きく咲いた華の中央、おまんこのビラビラから白い液体が漏れ出ていました。

（ああ……昨日セックスして中出しされた、夫の精液だわ……）

子供ができず、不妊症に悩んでいる私は、中出しされた精液を出来る限りそのままにしています。

中出しされて一晩経った精液、それが漏れ出したのです。

「おやあ？ ションベン以外も漏らしてるみてえだなあ、ヒヤハハ！」

（うう……なんでこんな日に……）

夫とのセックスは毎月一回、最も妊娠しやすい日を選んでまぐわいます。

それが昨日だったのです。

(ああ……大事な夫の精子が……)

不妊症とは言っても、問題があるのは夫の精子。

私の膣や子宮、卵巣などには問題なく、排卵も正常にしています。

でも、夫の精子が弱く、卵子に辿り着く前に全滅してしまうのです。

だから、できるだけ精子をナカに入れていたのですが……それでも妊娠しません。

「さて、水分補給といくか」

(え——!?)

——
続きは製品版でお楽しみ下さい。